

Title	近現代アメリカ文学のレジスタンス思想
Sub Title	Resistance in American literature
Author	竹内, 美佳子(Takeuchi, Mikako)
Publisher	
Publication year	2024
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2023.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究では、近現代アメリカ文学を牽引した 4 人の作家に焦点を当て、社会と対峙するレジスタンスの思想を探究した。19世紀アメリカン・ルネサンスの作家は奴隷制廃止に向けて、時代思潮を先導した。20世紀アフリカ系アメリカ人作家は人種隔離政策を批判し、公民権運動の先駆者となった。文学者のレジスタンスが近現代アメリカに貫流することを、テキスト分析と社会史研究によって浮き彫りにした。 This project explores the tradition of resistance in American literature, focusing on four writers. The antislavery writings of the American Renaissance raised public awareness of the urgency of abolition, while the voices of twentieth-century African American literature protesting racial segregation heralded the Civil Rights Movement. Through textual analysis with a historical perspective, this study highlights the literary currents of resistance that ran through antebellum and modern America.
Notes	研究種目：基盤研究 (C) (一般) 研究期間：2020～2023 課題番号：20K00396 研究分野：アメリカ文学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_20K00396seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00396

研究課題名 (和文) 近現代アメリカ文学のレジスタンス思想

研究課題名 (英文) Resistance in American Literature

研究代表者

竹内 美佳子 (TAKEUCHI, Mikako)

慶應義塾大学・商学部 (日吉)・教授

研究者番号：00227000

交付決定額 (研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000 円

研究成果の概要 (和文)：本研究では、近現代アメリカ文学を牽引した4人の作家に焦点を当て、社会と対峙するレジスタンスの思想を探究した。19世紀アメリカン・ルネサンスの作家は奴隷制廃止に向けて、時代思潮を先導した。20世紀アフリカ系アメリカ人作家は人種隔離政策を批判し、公民権運動の先駆者となった。文学者のレジスタンスが近現代アメリカに貫流することを、テキスト分析と社会史研究によって浮き彫りにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ヘンリー・ソローとハーマン・メルヴィルの文学にナショナリズムを見出す批評や、リチャード・ライトの文学を抗議小説と見做す定説に対し、古典の意義を問い直した。19世紀ヨーロッパ系アメリカ人作家の社会思想が、現代アフリカ系アメリカ文学の重要な源泉であることに注目し、アメリカ文学を貫く抵抗精神を人種横断的な見地から考察した。研究成果をまとめ、『アメリカ文学のレジスタンス思想』(仮題)として出版する予定である。

研究成果の概要 (英文)：This project explores the tradition of resistance in American literature, focusing on four writers. The antislavery writings of the American Renaissance raised public awareness of the urgency of abolition, while the voices of twentieth-century African American literature protesting racial segregation heralded the Civil Rights Movement. Through textual analysis with a historical perspective, this study highlights the literary currents of resistance that ran through antebellum and modern America.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカン・ルネサンス アフリカ系アメリカ文学 反帝国主義 奴隷解放 公民権運動 実存主義
人権

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

アメリカン・ルネサンスの文学と現代アフリカ系アメリカ文学には、社会悪に対するレジスタンスが百年の時を超えて貫流する。20 世紀のアフリカ系アメリカ人作家リチャード・ライトとラルフ・エリスンは、19 世紀のヘンリー・ソローとハーマン・メルヴィルを「自由の先駆者」と称えた。ライトの手稿とエリスンの初期評論に共通の言葉を見出したことが、4 人の作家を研究する契機となった。アフリカ系アメリカ文学にメルヴィルが与えた影響を研究し、文学作品の人種横断的な間テクスト性を論じる発表を国際メルヴィル学会（2015）で行った。公民権運動の源流であるソローの代表作には、古代ギリシアに遡る自然法思想を読み取り、共著 *Thoreau in the 21st Century*（2017）に論文を執筆した。本研究は上記の考察を発展させ、4 人の作家のレジスタンスを作品群に分析する。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカン・ルネサンスと現代アフリカ系アメリカ文学に通底する抵抗思想の探究を目的とする。アメリカン・ルネサンスの作家ソローは、トマス・ジェファソンを始めとする建国の父祖の独立精神に共鳴しつつも、西部探検を推進する拡張主義には異を唱え、奴隷制度に対する非暴力抵抗を貫いた。同時代の作家メルヴィルは自らの航海体験に基づき、当時の海洋旅行記とは異質の政治的視点を小説に導入し、西洋列強の植民地主義を批判した。

アフリカ系アメリカ文学研究は、奴隷体験記に始まる民族の系譜学として積み上げられてきた。ライトとエリスンは植民地時代に遡る民族文化を 20 世紀に継承し、奴隷の子孫としての抵抗精神を堅持する。同時に、両作家の文学は 19 世紀のアメリカン・ルネサンスとヨーロッパの実存哲学へと接続している。現代アフリカ系アメリカ文学のレジスタンスを人種横断的な視点から考察することは、新たな意義ある研究となる。

3. 研究の方法

(1) ソローの文学に国家主義を見出す批評を検証するため、随筆に言及されるフランスの自然史家ビュフォンに注目する。アメリカの生物退化説を唱えたビュフォンに対するトマス・ジェファソンの反論を踏まえた上で、建国の父祖と異なるソローの国家観を解説する。

(2) メルヴィルの文学がもつ社会意識の原点を、第一長編小説の近代批判に探る。テキスト分析を行うと同時に、同時代のアフリカ系アメリカ人社会による受容のあり方を活字媒体に調査し、メルヴィル文学の多民族的価値に考察を加える。

(3) ライトの後期作品は人種を超えた反戦思想に発展する。フランスで亡命作家となったライトの第二長編小説を、実存主義と冷戦構造という 2 つの視点から分析する。さらにライトの作家としての原点を、伝記に詳述されない祖先の人間像に考察する。

(4) エリスンの膨大な遺稿が 1999 年と 2010 年に出版された。2 つの版を照合して遺作の原形を探る。経済的繁栄の中で忘却されつつある 19 世紀の奴隷解放思想を、歴史の語り直しによって蘇らせようとした作家の創造意図を究明する。

4. 研究成果

(1) ソローの反帝国主義

ヘンリー・ソローの随筆「ウォーキング」（“Walking” 1851-52/1862）に潜む西部志向の意味を検証した。「ウォーキング」は自然保護思想の源流と称えられる一方で、アメリカ・アングロサクソン民族の西漸運動に通ずるナショナリズムを指摘する批評が 21 世紀にかけて現れた。ソローが「ウォーキング」に込めた思想は、18 世紀の米欧に起きた自然史論争を視野に入れることで鮮明化する。ヨーロッパの博物学者ビュフォンは「新世界の生物退化説」を唱え、アメリカに対するヨーロッパの優位性を主張した。これに対してトマス・ジェファソンとアレグザンダー・ハミルトンは反論を展開し、アメリカ建国期の政治は自然史論争と一体化の様相を呈した。ソローはビュフォンに挑む建国の父祖に共鳴しつつも、政治家の科学的実証主義を想像力によって超越しようとする。随筆「ウォーキング」が西に望むのは帝国の地勢図ではなく、詩人と哲学者の生む野生の思想であり、ソローの西部観は国家主義の対極に立つ。作品分析に加えて、アフリカ系アメリカ人作家ラルフ・エリスンのサウス・ウェスタン・ジャズ論を視野に入れ、ソローの反帝国主義を論究した。

(2) メルヴィルの近代批判

ハーマン・メルヴィルの文学が有する社会意識の原点を、第一長編小説『タイピー ――ポリネシアの生活』(*Typee: A Peep at Polynesian Life*, 1846) に分析した。1841 年に念願の捕鯨

船に乗り組むメルヴィルは、南太平洋のマルケサス諸島で船を脱走し、食人種と称される原住民の島で一時期を暮らした。この数奇な体験から生まれた冒険譚は、南洋諸島を支配する西洋列強に対する批判の書でもある。西洋世界から野蛮人と呼ばれる原住民が「暗黙の常識法典」というべき秩序を維持するのに対し、世界に大量の悲惨をもたらす西洋人は地上で最も獰猛な種族であるとメルヴィルは結論した。テキストに遍満する植民地主義批判を分析した上で、同時代のアフリカ系アメリカ人によるメルヴィル文学の受容を調査した。元逃亡奴隷にして奴隷解放運動の指導者となるフレデリック・ダグラスは1848年、自身の発行する奴隷解放運動紙『ノース・スター』に『タイピー』の抜粋を掲げ、新進作家メルヴィルを黒人社会に知らしめた。『ノース・スター』の原版を入手して小説の抜粋箇所を確認し、新聞発行者ダグラスの意図を分析した。

(3) ライトの自伝と奴隷制の記憶

リチャード・ライトの自伝『ブラック・ボーイ』(*Black Boy: A Record of Childhood and Youth*, 1945)を、言葉との格闘という視点から研究した。幼少期に父親と離別し、生活苦で就学の遅れたライトが知識の追求に苦闘する姿は、『ブラック・ボーイ』の一世紀前に書かれたフレデリック・ダグラスの奴隷体験記を彷彿させる。奴隷解放後80年を経ても知識が支配階級に占有される状況は変わらず、アフリカ系アメリカ人にとって言葉の獲得は社会との闘争であった。極貧の少年が前衛作家に脱皮する人生行路の謎を、祖先の系譜にも探った。ライトの祖先については、伝記作者ミシェル・ファブレもヘイゼル・ロウリーも詳述していないが、アメリカ国立公文書館の記録に基づく文献から知見が得られた。『ブラック・ボーイ』の背後には、19世紀より続く権力社会との闘争が潜む。ライトの自伝は世代を超えたアフリカ系アメリカ人の精神的遺産を担い、アメリカ社会と対峙する作品であることを明らかにした。

(4) ライトの反戦思想

フランスで亡命作家となったライトの第二長編小説『アウトサイダー』(*The Outsider*, 1953)は必ずしも理解を得られず、アメリカの批評家は一樣に、ライトが故国に根差す創造力を失ったと考えた。研究ではライトが現代世界に鳴らした警鐘を、実存哲学と冷戦構造という2つの観点から考察した。ライトの創造意図は、批評で等閑視されがちな犯罪捜査官の視点から読むことにより鮮明になる。主人公を追及するニューヨーク地区検事は、作品のエピグラフに掲げられたニーチェの「約束」という概念に基づき犯罪心理を解剖する。検事の思考は、ナチズムによるニーチェ哲学の歪曲史を辿ることで分析できる。検事は実存哲学の「力意志」への理解に基づき、主人公の連続殺人を断罪する。執筆当時のライトは過去の共産党員歴ゆえにマッカーシズムの標的となり、移住先の欧州にまで及ぶアメリカ国家機関の監視に苦しんだ。『アウトサイダー』の描く暴力の連鎖は、第二次大戦期のナチズムと全体主義化する冷戦構造の縮図である。ディストピアを通じて国家主義の呪縛を解き放つ作家の意図が、犯罪小説から浮かび上がった。

(5) エリスンの遺作に読む共生思想

ラルフ・エリスンは第一長編小説『見えない人間』(*Invisible Man*, 1952)によって文学史上時代を画したが、生前執筆していた第二長編小説には未知の部分が多かった。遺作の全容は、ジョン・F・キャラハン編『ジュンティーンズ』(*Juneteenth*, 1999)およびキャラハンとジョン・ブラッドレー編『銃撃前の3日間』(*Three Days Before the Shooting*, 2010)の出版により公となった。本研究では、主人公の老牧師が行う「ジュンティーンズの説教」を中心に、エリスンの歴史観を検証した。ジュンティーンズとは、南北戦争終結2か月後に連邦軍の将官がテキサス州ガルヴェストンに上陸し、奴隷解放を宣した6月19日に由来する。テキサス州の解放奴隷たちが宗教的野外集会として始めたジュンティーンズの祝祭は、やがて南西部諸州に広まった。老牧師の礼拝は、闇に葬られたアフリカ系アメリカ人の受難史を白人中心のアメリカ史と並置し、アフリカの大地と断絶した民族の精神を蘇らせようとする。注目すべきは、2020年にアフリカ系アメリカ人ジョージ・フロイド氏を白人警官が圧殺した事件を受け、翌21年にバイデン大統領が、毎年6月19日を連邦祝日とする「ジュンティーンズ独立記念日法案」に署名したことである。エリスンの遺作は、奴隷解放の祝祭を理解するうえで重要な意味をもつ。分断した国家の未来を歴史の語り直しに託すエリスンの創造意図を、遺作に解説することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 竹内美佳子	4. 巻 75
2. 論文標題 戦争の世紀——リチャード・ライトの『アウトサイダー』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 竹内 美佳子	4. 巻 46
2. 論文標題 "Walking" に読むソローの反帝国主義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『ヘンリー・ソロー研究論集』	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 竹内美佳子	4. 巻 119-1
2. 論文標題 環流する民主主義——メルヴィルの『タイピー』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『芸文研究』 巽孝之教授退任記念論文集	6. 最初と最後の頁 74-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------